

氏名	岸本 ^{きしもと} 真理子 ^{まりこ}
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲第28号
学位授与年月日	平成25年9月30日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論文題目名	近世茶道の研究—茶の表現と思想—
審査委員	主査 倉澤 行洋 副査 Horst Siegfried Henneman 同 吉川 直哉

一、論文内容の要旨

本論文は題名の通り、近世日本の茶道を、表現と思想の両面から考察したものである。

日本において茶道とか茶の湯とか言われる文化がいつ成立したかについては諸説あるが、大方の見方では、室町時代の珠光を茶祖とし、桃山時代に武野紹鷗、千利休らによって大成する。その後、消長を繰り返し、また時代の動向による変容を経ながらも、日本伝統文化を代表する一つのジャンルとして今日にまで至っている。

その学問的研究は、明治期以降に盛んになり、二十年前には茶の湯文化学会という全国規模の大きな学会もできて、人文科学・社会科学・自然科学のさまざまな分野において、さまざまな角度からの研究が為されるようになってきている。それは、茶道文化が、文化のさまざまな要素を含む、いわゆる「綜合文化」であることによるもので、じつさいそのような多くの分野からする多角的な研究なくしては、その全容の解明はなし難いのである。

しかるに、そういう多分野、多角度からの諸研究の中に、抜け落ちていく、あるいはおくらせているかに見える一分野があった。それは茶道の具体的な表現である茶会や、点前など茶の実際的な分野の研究である。茶道の諸要素を道・学・実に分ける考え方があつた。これに従えば、右の如き研究は「実」の研究と言える。

本論文は、そのような、茶道の具体的な分野に学問的メスを入れた本格的研究所、いわば先陣をなすものと位置づけることができる。この分野での学問的研究がおくれていたのは、それを可能ならしめるだけの茶道の実践経験を持った研究者が少なかつたことによる。自ら茶会を催し、点前をするなどの実践・経験に習熟するには、多大のエネルギーと時間を必要とする。また、経済的な裏付けが求められることもある。そのため、豊富な実践経験を持つ者は、学問的研究に打込むゆとりを失ってしまう。逆に学問研究者は実践経験の世界に足を踏み入れるのを躊躇する。

要するに茶道の本格的な実践と、本格的な学問研究とは両立するのが難かつたのである。

本論文の著者は、茶人の家庭に育つて、幼少より茶の湯を学び、長じて裏千家の茶道専門学校に学び、卒業後はそこで講師をして茶道の実践指導に当り、また本学大学院において、七年余に亘り本格的学問的茶道を研究に取り組んできた。

本論文の著者はこうして、茶道の本格的実践とその本格的な学問研究を両立させる力量を具える研究者に成長したのである。

本論文は、本文五章と、「序章」「結語」「資料」とより成る。以下に本論文の目次と、著者自身による要旨を掲げる。

目次

序章

- 一、先行研究
- 二、点前・作法研究の必要性
- 三、本研究の目的と方法

第一章 茶会の多様化

- 一、茶会の様相
 - a、時刻
 - b、床かざり
 - c、前礼・後礼
 - d、服装
- 二、大寄せ茶会の成立
 - a、大人数の茶会
 - b、連日の茶会
 - c、流儀行事としての茶会
- 三、茶会と茶事の分離
 - a、茶の事
 - b、江戸末期の「茶事」
 - c、大規模茶会と茶事の区別
- 四、茶会における新たな観念
 - a、茶会と陰陽五行
 - b、独座観念

小括

第二章 真行草による点前の体系化

一、台子点前

a、真・行・草の区別

b、『草人木』と『和泉草』

c、千家の台子

d、台子の体系化

二、運び点前の体系化

a、初期の運び点前

b、運び点前の発展

c、真行草による点前の体系化

三、使用する道具の格付

a、茶書にみる道具の体系化

b、茶杓の分類

c、真行草による分類の一般化

四、点前に対する新たな観念

a、点前と陰陽五行

b、台子点前における「乱れ」について

小括

第三章 炭手前の定式化

一、炭手前の成立

- a、炭手前以前
- b、拝見対象としての「炭」
- c、炭所望と廻り炭

二、炭手前の形式

- a、三炭成立以前
- b、初炭・後炭・立炭

三、炭手前に対する新たな観念

- a、日常としての「炭」と一会のための「炭」
- b、初炭
- c、後炭
- d、立炭

四、炭手前の展開

- a、炭所望
- b、廻り炭
- c、風炉の炭

小括

第四章 好み道具の普遍化

一、茶書にみる「好み」

- a、『山上宗二記』
- b、『松屋会記』
- c、江戸時代中期の茶会記
- d、『不白筆記』

二、「形」と「写し」

a、「形」の意味

b、利休形

三、「数物」の出現とその背景

a、名物に代わる道具として

b、作意から統一へ

c、七事式制定による道具の規定

四、「好み」と美意識

a、茶の湯の形態の変化

b、趣向の重視

小括

第五章 思想の深化

一、初期茶の湯における思想

a、茶の湯者への啓蒙

b、名物所持と侘教寄

c、茶の湯者としての覚悟

二、禅との関係

a、下学上達と坐禅修行

b、点前修行

c、『不動智神妙録』の影響

d、『禅茶録』

三、陰陽五行

a、『南方録』の出現
b、陰陽五行の広がり

四、茶禅一味の根本

a、清者の業
b、二方向の修行
c、清者からの却来
d、茶味禅味同一味の根本
e、新たな茶禅一味

小括

結語

一、今後の茶の湯への展開
二、今後の研究と課題

資料

史料・著書・論文

内容要旨

茶湯設立については、これまで多くの研究者によって論じられてきた。水屋仕事であった点茶を客前で行うようになった経緯や、同時代の茶会記の研究などで、成り期の茶湯はかなり明らかにになったといえよう。

しかしながら茶湯成立後、近世の茶湯の変遷についての研究は未だ不十分な点が多くある。先行研究としては、谷端昭夫氏が『近世茶道史』で人物を中心とした茶道史を論じているが、茶会や点前伝授の実態についての研究は、神津朝夫氏の『茶の湯の歴史』などにより近年始まったばかりである。

茶湯の具体的な実態の変遷については論じられることが少ないため、現在の茶湯と成立期の茶湯の間には大きな空白がある。茶湯伝承の現状において、その空白を無視し、現行の茶湯の根本を成立期と結びつけようとすることが多くみられる。当然の如く無理が生じ、また誤解も生まれる。

本研究は、茶湯成立後の近世の茶湯の変遷をより具体的に明らかにすることで成立期と現在の茶湯の間の空白をつなげることが大きな目的の一つである。

更に、その変遷にある根本的思想とはなんであったのかを探求したい。

本論文は序章と五章から構成されている。各章の要旨を以下に記す。

第一章 茶会の多様化

茶湯成立期より、茶会は初座・後座の二部制であり、懐石料理があり、露地での中立を挟んで再び席入り後、濃茶と薄茶という形式であった。そのような基本的形式はあったものの、炭手前は火が落ちれば行うのであり、湯が沸くのを待ち、時に応じて自由な趣向により茶会が行われていた。次第に炭手前も含めていくつかの茶会形式として整えられ、茶事七式の基となった。また、前礼・後礼などの挨拶や服装なども茶会に際して心得るべき要素となった。

客は一人から数人が基本であった。大人数を一度に招く会も皆無ではなかったが非常に稀であったといえよう。江戸時代を通じて、大人数を茶会に招くばあいには少人数に分けて連日茶会を行っていた。江戸中期には家元による遠忌の茶会が大規模かつ組織的に行われたが、やはり、連日行う茶会であった。しかし幕末から明治・大正にかけて、略式のいわゆる大寄せ茶会が広く行われるようになる。

正式な茶会は大寄せ茶会と別して「茶事」と称するようになった。茶事の形式は洗練されたまた整えられ、その内容や順序がはっきりと提示された。そして、格式高いものと位置付けられるに至り、縁遠いものとなった。茶事は、決められた形式を尽くすことが目的となり、独自の作意や手工もその形式の中でのみ行われるようになった。

洗練された茶会の形式ではあるが、形式にとらわれすぎると「独座観念」にみるような心を見失いがちである。形式から離れたとしても、その時々臨機応変な工夫こそ是とする自由を取り戻さなければならぬのではないか。

第二章 真行草による点前の体系化

貞享四年（一六八七）の『和泉草』では、台子点前が真行草により整理されており、伝授の段階が整えられていた。

宝暦七年（一七五七）以降成立の『不白筆記』では、真台子とその他台子以外の点前も組み込んで、真行草で分類した。台子だけではなく運び点前も、意味合いを整理したり新たな点前を加えて「小習事」とし、伝授の体系が段階的に整えられた。

また幕末から明治、裏千家十一代玄々斎によって台子十二段が整えられたと考えられる。玄々斎は茶杓の削り方についても真行草を組み合わせていくつかの段階に分類したとみられ、それらを台子の段階に合わせて使い分けた可能性もあるだろう。

その後、花入や炉縁、軸の表装や風炉など、多くの道具類が次々と真行草で分類されるようになっていった。

点前は真行草により段階的で明確な伝授が行われるようになり、また点前に際しての道具の取り合わせの仕様についても、真行草で格付けを行うことでより分かりやすく整理することとなった。

また新たに陰陽思想や「乱れ」といった観念が、点前に対して見出された。しかし、全ての点前に陰陽思想を当てはめようとしたり、全ての点前の根本を奥伝の台子に見出そうとする風潮によって、点前によっては本来の意味を見失ってしまうことになる。

第三章 炭手前の定式化

水屋仕事であった「炭」は、手前として成立した。その背景には、巧者に「炭」を所望する「炭所望」が、その一端を担ったものとみられる。文禄に入ると『松屋会記』に「まわり炭」の記述がみられる。各人それぞれの炭手前を行ったとみられ、茶湯者たちのなかに、「炭」を客前で行うことがすでに根付いていた。すなわち天正年間に、形式はさまざまであるが客前で「炭」を行うことが広がり、文禄年間には、炭手前が確立していたとみることができる。

また、利休時代より、茶湯者は一日中常に釜を掛けていることが求められていたが、江戸前期には、「常に釜を掛けている中での一会」と、「一会のための釜」の両形式がみられるようになる。次第に「常に釜を掛ける」ことの実践から遠ざかると同時に、一日の「炭」が一会に凝縮されるということが起こり、茶会の中での「三炭」が確立する。そこにはそれぞれに新たな観念が見出されていった。ぬれ釜を尊ぶこと、炭の流れに風趣や仏法の心持をみることに、客をいつまでもとめる心、などである。

「炭」が手前として成立すると、道具の位置や所作、灰の置き方や炭のつき方などが定まった。そして「初炭」「後炭」「炭所望」「廻り炭」などといった習い事として位置づけられるに至った。

炭手前の変遷は茶会の変遷に呼応するものである。茶事形式に定められた通りに火勢と湯相を制御し調節するのは炭手前の技術だが、火

勢が弱まれば時に応じて行う本来の「炭」を、もう一度茶事の中に取り込めば、炭手前だけではなく茶事も、豊かな表現を見せることができるであろう。

第四章 好み道具の普遍化

茶書・茶会記から「好み」の変遷をみると、初期の茶湯では日用品などから茶道具として見出す、見立てる、という意味で「好み」が使われると同時に「ある人の意匠・価値観・美意識によるもの」といった意味でも使われていた。江戸時代中期の享保年間になると、対象となる茶道具の範囲がかなり広くなり、『不白筆記』になると、あらゆる茶道具を「好み」で分類するようになった。この頃、今日の「好み」に近い意識が成立したといえよう。

また、道具の形状にかかわる「好み」であった「形」は、特定の人の意匠という意味で使われていたが、この「形」を「写す」ということが行われ、「一品物」から「数物」へと拡大していった。また、「利休形」については利休への敬慕や利休の神聖視といった背景により、特に重要視され、種類が増加していったと思われる。

さらに、茶道人口の増加と家元制度の成立が、茶道具に対する価値観にも大きな影響を与えた、今日的な意味での「好み物」が定まったといえるだろう。

このように、茶湯の中で「好み」はその意味に大きな変化をみせながらも、茶湯を牽引する動力として大きな役割を果たし、現在に至った。

流儀茶道では創意よりも統一が必要であったという事情があったためであるが、現在では、三百年前のような各茶人の「作意」や「好み」は喪失しており、現在の「好み」はその意味に明らかな違いが生じている。好み物である、といういわば肩書きが重要視されることにより、道具そのものに対する個人の主観が弱体化したといえないか。好み道具に限らず、箱書きに頼る目利きが主体となってきたことから明らかであろう。

喪失したのは「見出す茶湯」といってもいい。「見出す茶湯」によって新しき茶道の創造に竿頭一步を進めることを考えるべきなのではないか。

第五章 思想の深化

茶の湯は成立期より「道」としてとらえられ、高い精神性をもって語られた。高い境地に至った心をもって、名物所持の茶の湯や侘数寄の茶の湯にその姿をあらわそうとしたといえる。

『山上宗二記』の頃になり、茶の湯と禪の関わりが強調されるようになった。江戸初期に至って、日々の生活の中に茶湯者としての有りようを律するいわば下学上達の修行が家業等のために困難であるため、茶室から離れた禪の修行によって心を高めその精神を茶の湯に反映させるといふ茶の湯と禪の関係が出来上がった。以降、近世の茶の湯における思想には、一貫して禪が根本にあり、禪との関わりを抜きにして論じることができない。

江戸中期、『不白筆記』では、決められた形を崩さないことが強く求められた。その上で、『不動智神妙録』の教えである、どこにも止ることのない禪的悟りの境地を求める点前修行を行うことを目指した。同じように『禪茶録』では、点前をすることと座禅修行とを同様にとらえるという方向からの点前修行を説いた。

つまり、いわゆる「茶禅一味」は、禪の教えをもつて茶湯に表そうとする方向と、点前を行うことによつて禪の悟りを得ようとする方向の、二通りに発展したといえる。

「茶禅一味」は、言葉としては新しいが、『烏鼠集四巻書』における「清者の業」に根本的思想の一つをみることが出来る。ここでは徹底的に「心の掃除」を求めたのであり、煩惱を捨てようとする禪と自然に結びついたであろう。自らの心を高めるといふ目的において、茶の湯と禪は合致した。しかしこれは、神秀上座のいう「時々勤拭」つまり向去の段階である。『山上宗二記』では、はっきりと禪を打ち出し、その先の、六祖慧能のいう「何處惹塵埃」つまり却来の段階までを求めた。

茶室を清め、露地を清め、また点前中においても、道具を清めない点前は存在しない。徹底したこの具体的「清」は、内面的清らかさを持つ「清者」につながる。このいわば茶湯的清者は、禪的覚者と結びつき、茶湯を通じた禪的修行、また禪を通じた茶湯修行を行うに至ったといえよう。

茶湯は究めるべき道の修行であるという根本を有しているわけだが、それは当然茶湯の表現方法である諸相にも影響を及ぼしてきた。すでにある形式をそのまま享受するのではなく、常に究めようとする意識が働いてきたのである。点前に座禅的效果を見出し、茶会や炭にも仏道を見出した。さらに新たな価値として自然万物の哲理である陰陽五行をも見出すに及んだ。

しかし単純に清者たろうとする根本的思想を見失うと、茶禅一味の本来の意味も見失ってしまう。茶の湯修行は単なる行儀見習いとなつてはいないか。

主客の気遣いのありようを「道」として論じられることはあるだろう。掛けられた軸にある禅語の解釈などから禅を学ぶこともあるだろう。しかし、人間としての有り方・生き方に根底から影響する禅的修行の側面を見失ってはいけない。

結語

本研究では五本の柱から分析を試みたが、それによって近世の茶湯の伝授の大きな流れが明らかにできたと考える。茶湯成立期と現在の茶湯との空白を、より具体的につなげることができたのではないか。

現在行われている茶の湯は、多種多様に行われていた先人たちの夥しい数にのぼるだろう実践的茶の湯から、選り出されてきたほんの一部なのである。その一部のみを、利休時代の茶湯で説明付けることは到底できない。しかし丁寧に変遷をたどれば、利休時代とつながる鎖は明らかに見えてくることであつた。

現在では、積み重なつた歴史の上に整然とした伝授の形式ができあがっている。これらを習得するだけでも苦勞と年月を要するが、これらの形式を尽くすことが目的となつてはならない。ともすれば、形式を外れることを間違ひとして批判し、他を容認できない狭隘を生み出すこともある。規定通りの流れが取れそうになくなつたとき、いかにして対応するのかというところも楽しみの一つとできるような、鷹揚な構えで茶湯に臨んでもいいのではないか。茶禅一味を基とする限り、守りつくすことからやがては離れなければならないのだ。

そして、茶禅一味の根本を忘れてはならない。知識としての禅を学ぶのではない、茶湯そのものが禅的覚者に通じる修行形態の一つとなり得るのである。

先人の探求の系譜により至つた現在の茶の湯は同じようにつないでいかねばならない。道の探求こそが、茶湯を今日まで牽引してきた根源なのである。時に形式を打ち破り、その上に現れるだろう新たな茶湯を見究め創造を進めるために、本研究が資するところがあれば幸いである。

二、本論文の評価さるべき特色

① 先に述べた如く、本論文の本文は全五章から成るが、各章はすべて四つの節に分けられ、全二十節から成るように整然と組み立てられている。各章にはそれぞれ「小括」が付せられる。心地よい明晰な組み立てで、内容もわかりやすいように工夫され、論文全体がよく練られたものであることを窺わせる。随処に挿入された自撮の写真相も適切で、内容の理解を助けるものとなっている。

② 先に述べた如く、本論文の論者は、茶道の本格的な実践と本格的学問研究を両立させることのできる数少ない研究者の一人である。この論文にはそういう論者の強味が十分に発揮され、茶道のいわば内面と外面の両方に目配りして独創的な成果を挙げている。以下にそのいくつかを示そう。

③ 茶会は茶の湯の成立期より初座・後座の二部から成っていた。はじめは朝の茶会が好まれていたが、一日の食事が二食から三食に変わるとつれて、昼の茶会が中心になり、やがて朝・昼の会に、夜咄・暁・跡見・不時・飯後の茶会が加わって「七式」の茶会となる流れを明らかにした。

④ 茶会の客人は、はじめ一人から数人であったものが、大人数を何席かに分けたり、現代の大寄せ茶会が生まれてくる経緯を示した。

⑤ 台子点前や運び点前、また道具類が「真・行・草」の理念によって分類整理されていく過程を明らかにした。

⑥ 炭点前における「三炭」や「立炭」の意味が、一日中釜を掛けてあることが求められた時期と「一会のための釜」の時期とで異なった意味をおびるようになったことを明らかにした。

⑦ 道具における「好み」の意味を細かく整理した。

以上は本論文の「実」に関する部分である第一～四章について述べたのであるが、次の第五章は「道」に関するものである。ここでは、「茶の湯者としての覚悟」「禅と茶との関係」「陰陽五行説」などが取り上げられるが、特に禅と茶との関係について多くの紙面が割かれ、『不動智神妙録』や『禅茶録』が引き合いに出される。

そして「茶禅一味」の根本として「清者の業」という『烏巢集四卷書』の言葉を引き、更に神秀の「身是菩提樹 心如明鏡台 時々勤拭勿使惹塵埃」を引く。そしてこの段階は未だ道半ばで清者からの却来が無ければならないとして慧能の「菩提本無樹 明鏡亦非台 本来無一物 何処惹塵埃」を引く。そして同じ事は既に珠光の文の中に語られており、能の世阿弥も「色即是空」から「空即是色」も同じことを述べたものとする。

そしてこの章を次のように結ぶ。

「禅的な、心のありようを高めようとする茶の湯修行は、現代では行われることが非常に少ない。主客の気遣いのありようを「道」として論じられることはあるだろう。掛けられた掛物にある禅語の解釈などから禅を学ぶこともあるだろう。しかし、人間としての在り方・生き方に根底から影響する禅的修行の側面を見失ってはいないか。最も単純な、清者たろうとする根本的思想をも見失うと、その先にある茶禅一味の本来の意味も見失ってしまう。茶の湯修行は単なる行儀見習いとなっていないか。茶の湯修行の果てに、至った心をもって、茶の湯者は何をすべきなのか。一人点前をするのか、習得した点前を師匠となり教えるのか。否である。点前は茶の湯の表現の一形態にすぎない。炭の手際も道具の目利きも同様である。茶の湯には心のありようを高めようとする思想が根底にあり、茶の湯者がその心を現わす手段は、あらゆる諸相を包含した「茶会」にあるべきであろう。他所に習いに出かける茶の湯ではなく。自らの内に根付かせ自らが行う茶の湯であるべきではないか。」

読む人をして思わず襟を正さずにはおかない気遣いと真情がこもっている。

三、残された課題

これについては、論者自身が「結語」の中で触れている。すなわち

- ① 茶会の分野で、懐石や細かい作業については未解明である。
- ② 点前伝授については、できれば流儀を越えて、更に具体的な研究が求められる。
- ③ 炭点前については、炭そのものこと、用いる道具類についての研究が求められる。
- ④ 茶道具については、本論文では「好み物」の整理にとどまったが、更に広範な研究が望まれる。
- ⑤ 各流派の茶の湯の異同、相互影響の研究も必要。

以上は論者自身の反省であるが、更に一つ付け加えれば

⑥ 茶の湯は、東洋に生まれ育まれた東洋文化の精華ともいうべきすぐれた文化であるが、この茶の湯は、これからの世界においていかなる存在意義があるのか、またあらしめるべきかを考えつつ、論者が、これを実践し、また研究することが期待される。

四、審査結果の要旨

本委員会は、以上の如き観点から、本論文を、着想の獨創性、叙述の仕方、構成の整合性などにわたって慎重に審査した結果、全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。